

中学校音楽科におけるポップス教材の有効性の検証

ー生徒の音楽嗜好との接点を求めてー

教育学研究科 教育実践創成専攻 教科領域実践開発コース 中等教科教育分野 兵藤建希

1. はじめに

今年度の教育現場は、新型コロナウイルスの影響が殆ど緩和され、コロナ禍以前の教育現場が戻っていた。本研究では学部卒業論文の研究から更に研究を深化させ、生徒の音楽嗜好の中心であるポップスと中学校音楽科との接点を模索するべく実践を行った。1年間の実践から見てきた中学校音楽科における歌唱領域でのポップスの有効性についての検証結果を示す形でまとめる。

2. 研究動機

現行学習指導要領解説において、音楽科の目標及び内容では、「音楽活動を通して、それぞれの教材等に応じ、音や音楽が生活に果たす役割を考えさせるなどして、生徒が音や音楽と生活や社会との関わりを実感できるよう指導や工夫すること」と示されている（学習指導要領解説 p.9 第2章.音楽科の目標及び内容）。また、2018年度の中央教育審議会答申において、小中学校及び高等学校を通じた音楽科の課題について「音や音楽と自分との関わりを気づいていけるよう、生活や社会における音や音楽の働き、音楽文化についての理解を深める学習の充実を図る」とあり、更に「B鑑賞」に、「生活や社会における音楽の意味や役割」、「音楽表現の共通性や固有性」について考えることを事項として示した」とある（中央教育審議会答申.2018.p.8）。ここから、音楽の知識や歌唱表現を身につけるだけでなく、生活や社会との関わりを感じ取れるような指導が求められていることがうかがえる。

また、本年度に実習をさせていただいた甲府市立のある中学校での事前アンケート調査によると、「普段の生活でどんな音楽を聴きますか。（複数回答可）」の設問に対し、「日本のポップス・ロック・ダンスミュージック」を選択した生

徒は75.2%、「海外のポップス・ロック・ダンスミュージック」を選択した生徒は56%と所謂ポップスと称されるジャンルを聞く生徒が多いことがわかった（選択肢の生成は日本レコード協会2019年度調査結果から引用した）。しかし、中学校音楽科教材に掲載されているポップス曲とされている楽曲は《君を乗せて》、《涙そうそう》《美女と野獣》《We will rock you》など、多くは生徒たちが生まれる以前に流行した楽曲であり、現代のヒットチャートで掲載されている楽曲はまだない。また、先程のアンケートでは教科書に掲載されているクラシックは10.1%と先程のポップスに比べると少数派であることがわかった。このことから教科書にはポップスは掲載されているが、生徒の音楽嗜好の中心である「日本のポップス・ロック・ダンスミュージック」と「海外のポップス・ロック・ダンスミュージック」（以下ポップスとする）と現在の中学校音楽科の掲載曲が噛み合っていないことがわかる。

このずれは生徒の授業に対する意欲にも影響を与えており、実習校での事前アンケート調査によると、「音楽を聴くことや歌うことが好き（得意だ）」という設問に対し、「とてもそう思う」「そう思う」と回答した割合は89.9%だが、「普段の生活で歌う場合（カラオケや友達と口ずさむ時）と授業中で歌う時の歌いやすさについて教えてください」という設問に対し、「普段の生活で歌う倍の方が歌いやすい」と回答した生徒は51.4%に対し、「授業中の方が歌いやすい」と回答した生徒は13.8%と授業中の歌唱表現に影響が出る結果となっていた。また、「音楽を聴くことや歌うことが好き（得意だ）」という設問に対しては「とてもそう思う」「そう思う」と回答した生徒は81.1%と8割以上いることがわかった。この結果から、音楽自体に肯定的な生徒は多いが、実際の授業で歌うことに対する抵抗感の強

さが見えてくる。しかし、歌唱表現においては言葉による説明だけでなく、自身が感じた曲想をもとに、創意工夫を生かした音楽表現をするための技能を身につけることが求められる。歌唱表現を含む音楽活動を通して音楽に対する感性を豊かにし、音楽に親しんでいく態度を養い、豊かな情操を培うことが生活や社会の中の音や音楽、音楽文化と豊かに関わる資質・能力を身につけることにつながるのだが、「歌うことは好きだけどあまり得意でない」といった生徒や「音程が合わない」といった生徒に対しては普段聞くことがない音楽にいきなり表現をつけるということはハードルが高い。その結果、本来の題材目標を達成することが難しくなってしまう。こうした現状に課題意識を感じ、また、今度自身が音楽科の一教員として授業づくりをしていく際にどのような指導ができるのかについて考えたいと思い、本研究を始めた次第である。

3. 研究目的

ポップスを使った先行研究を辿ると、小学校での実践例が多く、中学校の実践例は少ない。多くの先行研究がポップスを主題材とした授業構想となっているがそのようにポップスを主題材として扱う場合に一つの問題が生じる。それが音楽科の年間授業数と現在の指導すべき授業数の関係である。現在の音楽の授業は年間のカリキュラムがとても詰まっていることに対し年間で行える授業数が限られているため、時間を確保した上でポップスを主題材として授業を行うことは難しい。そこで新たに学習指導要領で共通事項として提示された「音楽を形づくっている要素」に着目することで、ポップスを取り入れた授業への可能性を感じた。本研究では中学校音楽科歌唱領域指導において音楽を形づくっている要素を指導する際の手立てとしてポップスを使用することの有効性を明らかにしたい。ポップスを取り入れることによって、生徒の音楽科教材への抵抗感が薄れ主体性を持てること、また生徒が音楽表現をする上で音楽を形づくっている要素を意識しながら使えるようになることを目標としている。

4-1. 本研究における「ポップス」の位置付け

ここから、具体的な研究内容について示す。まずポップスの定義だが、ポップスとは英語の「popular」から来ており、厳格な定義をされていることはなく、さまざまな意味合いを包括して総称されている。ここでは町田(2021)が最も広い意味として定義している、「大衆音楽としてのポップス」という意味合いで使用する。ある一定の層で評価の高い音楽ではなく、一般大衆に受け入れられているもので売れていれば映画音楽でも、ジャズでも、演歌でもポピュラー音楽として分類されるものである。

4-2. ポップスと音楽科教材との関連性

まず、小中学校音楽科の内容は「A 表現」「鑑賞」および「共通事項」で示されている。さらに共通事項の内容はそれぞれア、イと分けて示され、アの内容として、「A 表現」および「B 鑑賞」の指導を通して、「音楽を形づくっている要素や要素同士の関連を知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感じること」とされる。ここでの音楽を形づくっている要素というのは音色、リズム、速度、旋律、テクスチュア、強弱、形式、構成などの主に八つの要素のことを指しており、音楽科教材に留まらず全ての音楽はこれらの要素をもとに構成されている。音楽科教育における各題材はこれら八つの中から二つあるいは三つを授業の中で取り扱うことを想定されている(交響曲第5番ハ短調第一楽章においては音色、リズム、構成、形式、旋律である)。表1は学部論文において指導教官の監修のもとポップスにおける最も顕著に聴き取れる音楽を形づくっている要素を取りまとめたものである。

楽曲名	アーティスト名	関連づけられる要素
怪獣の花唄	Vaundy	先述
ドライフラワー	優里	旋律(サビの3回繰り返し返される歌詞)
アイドル	YOASOBI	先述
マリーゴールド	あいみょん	形式(カノン進行)
シンデレラボーイ	Saucy Dog	旋律(裏拍で入るメロディ)
残酷な天使のテーゼ	高橋洋子	構成(コード進行の切り替わるタイミング)
サウダージ	ボルノグラフィティ	旋律(順次進行と跳躍進行)
水平線	back number	旋律(Aメロの殆ど音高が変わらないメロディ)
さよならエレジー	菅田将暉	旋律(下がる旋律と上がる旋律)
subtitle	official 髭男 dism	先述

表1 DAM 公式 HP-DAM 年間カラオケランキング1位-25位の楽曲と結び付けられる音楽を形作っている要素

このように、現在親しまれているポップスにおいても音楽を形作っている要素という視点を用いて着目することで音楽科教材との共通点を見出すことが可能となる。

6. ポップスの教材としての有用性

先行研究から、ポップスの教材としての有用性を示す。

町田（2021）は小学校5学年および6学年を対象としてアニメ「鬼滅の刃」オープニングテーマとして使用された《紅蓮華》を主題材として取り扱い、鑑賞領域、歌唱領域において曲想と音楽の構造や歌詞の内容との関わりについて理解することを目標として設定した。《紅蓮華》のメロディーから分析を行い、シンコペーションの繰り返し、楽曲構成、音の抑揚、4小節ごとのコード進行の繰り返しなどから音楽科教材としての可能性を見出し、小学校音楽科におけるポピュラー音楽の必要性を示した。一方で教師のポピュラー音楽に対する知識や指導用に編曲するための技量が必要だということを提唱した。

小野田（2009）は器楽領域において、劇的ビフォーアフターより《TAKUMI》他ポップス曲を使用し、児童が主体的に取り組み表現の力を高める学習指導の在り方を模索した。器楽の技量と表現を高めるために聴き馴染みのあるポップスを用いるとともに、共通事項の音楽を形づくる要素を授業のねらいと結びつけたことが功を奏し、楽しかったという感想だけではなく音楽の学習として身につけるべき知識や楽器を演奏する力が身についたという実感を持ちながら活動することができたと言及している。その一方で、児童が自ら課題を設定することの難しさを示した。

7-1. 研究方法

本研究では、ポップスを扱うクラスとポップスの代わりに《青と夏》に似た特徴を持つ既知のポップスではない楽曲を扱うクラスで授業を行い、授業前にポップス曲（ポップスではない楽曲）

を再生し、生徒の反応を見取った。また、授業の冒頭や題材を歌う時に併せてポップス曲（ポップスではない楽曲）を歌い、2曲の比較を比較させながら生徒の音楽表現の違いを動画分析にて行った。動画分析では音楽AIアプリ Moises を用いて歌声のみを抽出し、Apple 社が開発した音楽制作ソフトウェア Logic Pro 用いて音声ファイルを取り込み、プラグイン Loudness Meter を使ってラウドネス値を測定した。また、事前アンケートと事後アンケートの結果を比較し、歌唱領域の学習に対する意識の変化を調査した。

7-2. 授業実践について

実際に行った「ポップスを用いた歌唱領域の授業実践」について、以下に概要を示す。

(1) 授業実践の概要

- ①対象校 山梨県内の公立中学校
- ②期間 2024年11月
- ③対象 第2学年2クラス
- ④題材 『教育芸術社「中学生の音楽2.3上」』日本の歌《荒城の月》
- ⑤使用したポップス曲 Mrs.Green Apple《青と夏》
- ⑥ポップス曲の代用として使用した曲《夏の思い出》
- ⑥題材名「曲想に着目しながら表現を工夫して歌おう」
- ⑦題材の音楽的特徴と使用したポップス曲の選定方法とその音楽的特徴

ポップスを使用するにあたり、今回の実践では町田（2021）のポップス曲の選定の基準に批准した。選定基準は以下の通りである。

- i 生徒の生活や実態に合っているか
- ii 音楽を形作る要素が顕著に現れているか
- iii 生徒に広く認知されているか
- iv 歌詞が共感できるか
- v 稚拙、卑猥な表現が含まれていないか
- vi 旋律が口ずさみやすくなっているか（一つフレーズが1オクターブ以内に収まっているか）
- vii 短期的な流行に留まらず、2年～5年ほどの期間で広く認知されている楽曲であるか。

まず、今回の題材である《荒城の月》の音楽的特徴を以下に述べる。この曲はハ短調という暗

い雰囲気、緩やかなテンポ、秋を感じさせる歌詞、2小節で一つのフレーズが成っている、4分音符と8分音符から構成されている旋律（僅かに16分音符有）、上行、下行が繰り返されている旋律である（図2）。

《青と夏》はホ長調の明るい雰囲気、疾走感のあるテンポ、2小節で一つのフレーズが成っている、夏を想起させる歌詞、2小節で一つのフレーズが成っている、4分音符と8分音符から構成されている旋律（僅かに16分音符有）、上行、下行が繰り返されている旋律である（図3）。

今回ポップスとして取り扱った《青と夏》は町田（2021）の基準の一つを除いて満たすものである。一オクターブより広い音域を取り扱うこの曲だが、この音域は《荒城の月》とほとんど同じ音域であるため、歌唱表現において支障がでないと判断した。この二つの楽曲は共通点と相違点が複数あり、《荒城の月》と比較を行うことで、荒城の月と同じような表現をできる場所、違った表現をしなければいけない場所を考えることができる。何より《青と夏》という楽曲は、2017年にリリースされてから現在まで各ストリーミングサービスで常にランキング上位に入るほど非常に認知度が高いものであるため、生徒がすぐに歌うことができる。結果、棒読みのような表現をしないのではないかという判断のもと、選定した次第である。

ポップス曲ではない楽曲については既知の学習題材である《夏の思い出》を使用した。《夏の思い出》の音楽的特徴は、ニ長調という明るい雰囲気、落ち着いたテンポ2小節で一つのフレーズが成っている、夏を想起させる歌詞、2小節で一つのフレーズが成っている、4分音符と8分音符から構成されている旋律（僅かに3連分符有）、上行、下行が繰り返されている旋律である。ニ長調は《青と夏》の下属調の更に下属調であり、《荒城の月》のロ短調の平行調であるため双方と親和性が高い調性である。《青と夏》とテンポ感が大きく違うもののそれ以外の要素は大きく変わっておらず、とりわけ生徒が歌ったことがある、歌いやすい楽曲ということがこの楽曲を選出した最も大きな理由である。各楽曲の比較表を下

表2に示す。

	荒城の月	青と夏	夏の思い出
調	ハ短調	ホ長調	ニ長調
速度	早い	早い	遅い
歌詞の内容	秋を想起させる歌詞	夏を想起させる歌詞	夏を想起させる歌詞
フレーズ	2小節で1フレーズ	2小節で1フレーズ	2小節で1フレーズ
リズム	4分音符と8分音符	4分音符と8分音符	4分音符と8分音符
旋律の特徴	上行、下行が繰り返される	上行、下行が繰り返される	上行、下行が繰り返される

表3 それぞれの楽曲の音楽的特徴の比較

7-3. 本活動のねらいと設定の背景

この活動のねらいは、《荒城の月》という普段生徒が聴き馴染んでいない楽曲の情景や心情を思い浮かべ、曲想を味わいながら歌うことである。この歌唱の学習を通して、我が国の自然の美しさを感じ取ったり、我が国の文化や日本語によって奏でられる歌詞の美しさを確かめながら、日本の音楽文化についての理解を深めることをねらいとしている。本題材は中学校学習指導要領では、我が国の音楽文化に親しみ、より深い愛着を育む観点から、日本の自然や四季、文化、そして日本語の持つ美しさを味わえる歌曲を積極的に取り上げることが具体的な改善事項として示されているのである。「荒城の月」はその一つであり、人の世の栄枯盛衰を表現した楽曲である。普段聴き慣れない楽曲に対して適宜ポップスを取り扱うことで、生徒の主体性を引き出すことができると考えている。また、2曲を対照比較することでそれぞれの音楽の共通点、相違点を比べることができる。元々自然に表現できる、或いは表現が工夫しやすいポップスを手がかりとし、抵抗感を感じる一昔前の楽曲でも表現が

行いやすくなるのではと推察した。ポップスをただ楽しく歌うというだけではなく、ポップスの表現を音楽を形づくる要素で題材と結びつけることで生徒により題材の曲想が印象づけられ、曲想に応じた表現をすることが可能になると考える。そして、生徒に一昔前の我が国の音楽文化の哀愁や美しさを知ってもらうことで他の様々な音楽に対しての抵抗感が少しでも無くなり、生涯を通しての音や音楽に対する愛着を育むことにつながると考え、本活動を設計した。

8-1. 《青と夏》を使用した授業実践について

ポップスを使用したクラスは1時間目にまず授業前に《青と夏》を再生し、生徒に楽曲を認知させた。幸いなことに《青と夏》は実習校の給食の時間に何度も再生されていたこともあり知らない生徒はいなかったため、授業前に口ずさむ生徒が少なかった。授業の開始時にウォーミングアップとして《青と夏》を歌唱した。ここでも知らない生徒はいなかったことが功を奏し、すぐに歌唱することができた。また合唱コンクール直後ということもあり、1学期からの歌唱領域の授業と比較しても声量が大きく、一人一人がしっかり発生を行っていた。この時のラウドネスI値は以下の通り-22.7LUFSである(なおラウドネス値とは、音の知覚的な大きさを表す指標の一つである。音の物理的な大きさ(音圧レベル)だけでなく、人間の聴覚特性や心理的な要素も考慮して算出される。それぞれM値は瞬間的な音量、S値は短期間での音量、I値は総合的な音量を示す。なお1LUFSは1dBに相当する)。



図1 ポップス有 授業冒頭の《青と夏》のラウドネス値

その後《荒城の月》を鑑賞し、作曲者、作詞者、歌詞の意味を確認し、題材の背景を確認した。その後《荒城の月》の音取りを行った後に、授業冒頭で歌った《青と夏》と違うところや同じところを話し合った。そこで速度や調性が違うという

ことから声色を暗く歌おうなど工夫をしようとしている様子が見られた。授業が進行していくにつれ、授業冒頭に比べて声量が落ちていき、生徒の発言数も少なくなっていったが、ここで再度《青と夏》を歌唱した。その時、生徒は荒城の月よりも明らかに大きい声量で再び楽しそうに歌唱をしており、その後《荒城の月》を歌った際により声量を感じることができた。1時間目は音とりのみで終わってしまったが、授業の最後に《荒城の月》を2小節だけ通して歌うことができたため、授業最後の荒城の月のラウドネスI値を図2に示す。この時のラウドネスI値は-30.2LUFSであり、授業冒頭の《青と夏》と比較すると声量は落ちているものの、実際には確かに声量を感じることができていた。



図2 ポップス有 1時間目の《荒城の月》2小節を歌唱した際のラウドネス値

2時間目は再度冒頭に《青と夏》を再生しており生徒に前回の授業の内容を自然と想起させ、再びピアノ伴奏に合わせて歌唱を行った。この時のラウドネスI値は-24.3であり前回と比べるとやや声量が落ちているとわかった(図3)。

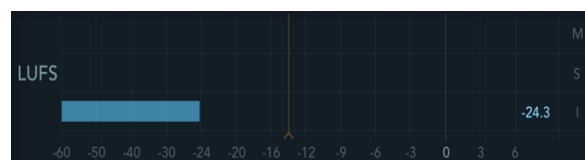


図3 ポップス有 2時間目冒頭に《青と夏》を歌唱した際のラウドネス値

その後前回確認した音色を暗くして歌うこと、遅いテンポのため呼吸を深く取ることなどを確認したのち、今回は新たに旋律の上行、下行について確認した。どちらの曲も上行する際にクレッシェンドをし、下行する際にデクレッシェンドを行なっている。生徒は《荒城の月》を歌う際にはその表現はできていないが《青と夏》を歌う際にはその表現ができているとこれまでの歌唱から感じたため、すでにできていることを《荒城の月》でも実践しようと促した。すると強弱の差

をはっきりとつけることができおり、ラウドネス M 値にも図4のように差が現れていることがわかった。



図4 ポップス有 2 時間目最後に《荒城の月》2 小節を歌唱した際のラウドネス値

8-2 《夏の思い出》を使用した授業実践について

《青と夏》を使用せずに《夏の思い出》を使用した授業実践も基本的な流れは変更せずに行った。授業冒頭に夏の思い出を流し曲を認知させ、授業冒頭に全員で歌唱をし、題材学習に入った。その際のラウドネス I 値は-26.3 であり、《青と夏》の歌唱と比べるとやや値が低くなっていることがわかる（図5）。

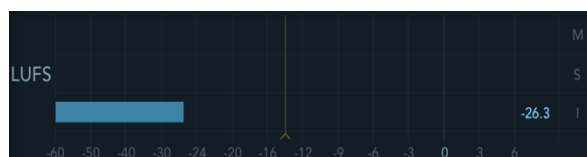


図5 ポップス無 1 時間目《夏の思い出》を歌唱した際のラウドネス値

その後も同じ内容で題材についての理解を深めた上で2曲の比較を行った。音色やテンポの違いが意見として出てきた上で音とりを行った。その後《青と夏》1時間目の実践と同じタイミングで生徒の音量が落ちてきたため再度《夏の思い出》を歌唱し、生徒の声が出やすくなるかを確かめた。そしてこの授業の最後にも《荒城の月》を2小節歌唱し、その際のラウドネス I 値を図6に示す。ラウドネス I 値は-30.4 であり、ポップス使用時と比べると大差がない数値となった。

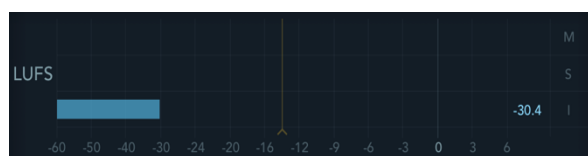


図6 ポップス無 1 時間目 荒城の月 2 小節を

歌唱した際のラウドネス値

2 時間目も基本的な授業の進行は変えず、授業前に《夏の思い出》を再生し、授業冒頭にあらためて全員で《夏の思い出》を歌唱した。その時のラウドネス値は-30.4 であり、ポップス使用時と比べると音量が落ちていたことがわかる（図7）。



図7 ポップス無 2 時間目夏の思い出を歌唱した際のラウドネス値

その後ポップス時と同じように前回確認した音色を暗くして歌うこと、遅いテンポのため呼吸を深く取ることなどを確認した後に、ポップス使用クラス同様、新たに旋律の上行、下行について確認した。どちらの曲も上行する際にクレッシェンドをし、下行する際にデクレッシェンドを行なっている。生徒は《夏の思い出》を歌う際にはその表現はできていないが《荒城の月》を歌う際と比べその表現がし易いのではないかとこれまでの歌唱から感じたため、ポップス使用クラスとは指導方法を変え、《夏の思い出》から表現の付け方を指導した上で最後にその表現を《荒城の月》で意識できるか試みた。その際の強弱の差をラウドネス M 値で測定すると図8のようになっており、ポップス使用時と比較すると強弱の差が表現できていないことがわかった。



図8 ポップス無 2 時間目荒城の月 2 小節を歌唱した際のラウドネス値

8-3. 事後アンケートについて

《青と夏》使用クラスのアンケート内容は以下の通りである。（回答者 27 名）

Q-1「音楽を形作っている要素」をいつもより意識しながら曲を歌うこと（聴くこと）ができましたか。」（回答者 18 名）

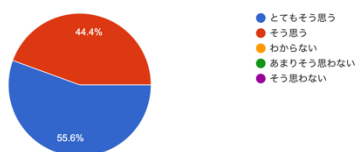


図 15Q-1 アンケート結果

生徒の意見

- ・その曲の強弱や、声の出し方を工夫したら、歌いやすくなったし、雰囲気も出たから。
- ・強弱をつけて歌えた
- ・いつもなんとなく歌っていたり聴いていたが強弱や声の大きさ、リズムなどの様々な要素を意識して行い、いつもよりも曲を深く学び集中して歌ったり聴いたりすることができたから
- ・フレーズ感を考えて歌ったのは初めてだから
- ・聞いたことのある曲だったから
- ・明るい曲を歌うときは口を大きく開けることや、暗い感じの曲を歌うときは声のトーンを下げる感じで歌うことができたから。
- ・意識して歌うとうまく歌えている気がするから

Q-2 「この授業を通して授業で歌うことについての歌いやすさ、歌いにくさはどう変わりましたか」

- 歌いやすかった生徒・・・16 人
- 歌いにくかった生徒・・・0 人
- 変わらないと回答した生徒・・・2 人

《夏の思い出》使用クラスのアンケート内容は以下の通りである。（回答者 27 名）

Q-1「音楽を形作っている要素」をいつもより意識しながら曲を歌うこと（聴くこと）ができましたか。」

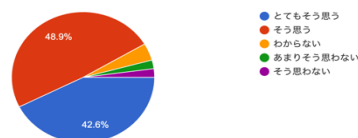


図 16Q-1 アンケート結果

生徒の意見

・音楽を形づくっている要素を意識しながら歌うといつもより楽しく感情のこもった歌を歌えます

・楽しいから

・ただ歌うだけではなくて、こんな曲だからこんなふうに歌おうかなと考えながら歌うことが楽しかった

・音程を意識したり、歌詞の意味を把握して、その歌詞やメロディーにあった歌い方をすることができた。暗い歌い方にしたり、明るい歌い方のしたり、滑らかに歌ったりすることができたからです。

・わからないからです

・音楽の要素を意識して歌うと前より少し歌がうまくなった気がして気持ちよくなり、意識したくなるから

・2つの曲の違いや歌うときの表情の差がわかったから。

Q-2 「この授業を通して授業で歌うことについての歌いやすさ、歌いにくさはどう変わりましたか」

○歌いやすかった生徒・・・16 人

○歌いにくかった生徒・・・4 人

○変わらないと回答した生徒・・・7 人

9-3. 結果

音声分析から、生徒の音楽表現を引き出すために二つの曲を比較しながら学習を進める方法が効果的だということがわかった。比較する曲はただ生徒が知っている曲、歌える曲にするだけではなく、生徒が好きな曲を使うことでよりその効果を増幅できることがわかった。ただ知っている曲を使用するだけでは比較しながら学習した際でも効果を見込めないことがわかった。

アンケート結果からはポップスを使用したクラスでは歌いやすさの変化について 2 名が「変わらない」と述べ、16 名が「歌いやすかった」と述べている。ポップスを使用しないクラスについては「歌いにくかった」という生徒が増え、「変わらない」と回答した生徒も同時に増えていた」

9-4. 考察

今回の研究からポップスを使用した場合でも、ポップスを使用しない場合でも2曲を比較しながら表現の工夫を行うということが効果的だということがわかった。ただ、ポップスを使用しない場合ではその効果は落ちてしまっていたことから、ただ知っている曲で比較するだけではなく生徒が好んでいる曲を扱うことこそが今回の比較学習に適していたと言える。また、ポップスを使った生徒の多くは歌いやすいと回答していたことに対し、ポップスを使用していなかった生徒は歌いにくかった、変わらないと回答した生徒が半数以上いたことから、ポップスの教材としての有用性を示すことができたと考えられる。さらに、自由記述においてはポップスを使用したクラスで「音楽の要素を意識しながら歌うことができた」と回答した生徒が18人中18人だったことに対し、ポップスを使用しなかったクラスでは「そう思わない」「思わない」「わからない」と回答した生徒が一部いたことからまた題材を達成するための手立てとして有効だったと考える。

課題として、今回のポップス曲を選定するときに候補曲が多く出てこなかったことと、《青と夏》ほど10代から広く浸透している楽曲が数少ないことだと思われるため、様々な領域において他のポップス曲でも同じ様な効果が見込めるかを検証していく。また、今回は実験対象がそれぞれ1クラスずつだったため他のクラスで行ったときにどのような結果が出るのかを来年度以降検証を重ねていく所存である。

○. 参考・引用文献

- ・文部科学省（2008）中学校学習指導要領解説 音楽編
- ・文部科学省（2017）中学校学習指導要領解説 音楽編
- ・中村（2023）「知覚と感受の言葉を使えるようになるための鑑賞指導－中学校音楽科における常時活動の実践を通して－」『山梨大学教職大学院 令和5年度 教育実践研究報告書』

- ・コンテンツファン消費行動調査（2012）好きな音楽のジャンル 博報堂
- ・特定の課題に関する調査（音楽）調査結果（小学校・中学校）（2007）国立教育政策研究所 教育課程研究センター
- ・中学校学習指導要領(平成29年告示)解説(2018) 音楽編 文部科学省
- ・教育芸術社 「中学生の音楽1」（令和3年度版）
- ・教育芸術社 「中学生の音楽2・3上」（令和3年度版） デジタル教科書 指導者用
- ・教育芸術社 「中学生の音楽2・3下」（令和3年度版）
- ・教育芸術社 「中学生の音楽器楽」（令和3年度版）
- ・教育出版社 「中学音楽1 音楽のおくりもの」（令和3年度版）
- ・教育出版社 「中学音楽2・3上 音楽のおくりもの」（令和3年度版）
- ・教育出版社 「中学音楽2・3下 音楽のおくりもの」（令和3年度版）
- ・教育出版社「中学器楽 音楽のおくりもの」（令和3年度版）
- ・町田（2021）「学校音楽におけるポピュラー音楽の有用性についての一考察 小学校高学年を対象として」お茶の水女子大学附属小学校研究紀要
- ・黄夕珈（2022）「J-POPとペントニック」エリザベト-音楽大学音楽研究科 研究会報告 研究授業
- ・小野田（2009） 児童が主体的に取り組み、表現の力を高める音楽科学習指導の在り方
- ・奥田（2018）「小学校低学年における「声量」重視した地声による歌唱に関する音声分析的アプローチ-歌唱の際のピッチに着目して-」玉川大学 教育実践学研究 第19号

9. 謝辞

この研究を遂行するにあたり、終始適切な助言を賜り、また丁寧にご指導くださった実習校の先生をはじめとする諸先生方に心より感謝申し上げます。